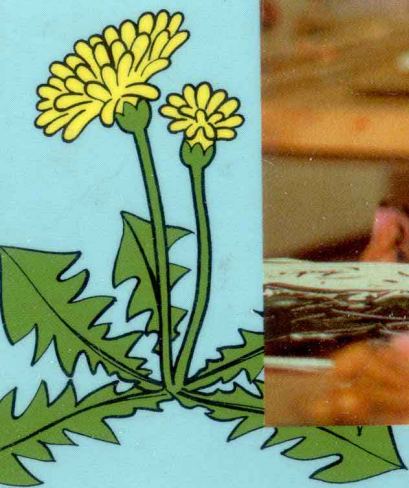


ベトナムから来た

ニンちゃん

臣永正広





NDC913

小学校中・高学年向き

184ページ

日本音楽著作権協会(出)許諾8972481-901号

ベトナムから来たニンちゃん

© Masahiro Tominaga, 1990

1990年4月9日 初版発行

著者 臣永正広

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

〒104 東京都中央区銀座1-3-9

振替 東京1-326

電話 出版部03(535)2301 販売部03(535)4441

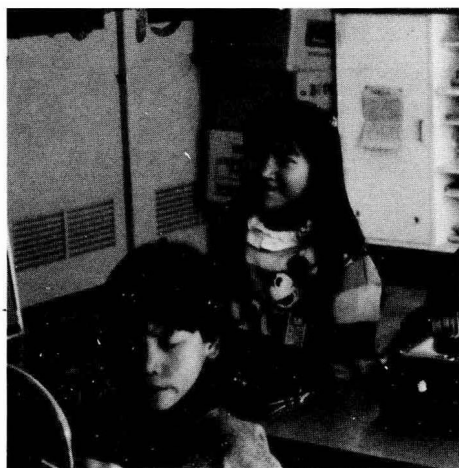
印刷所 東京研文社

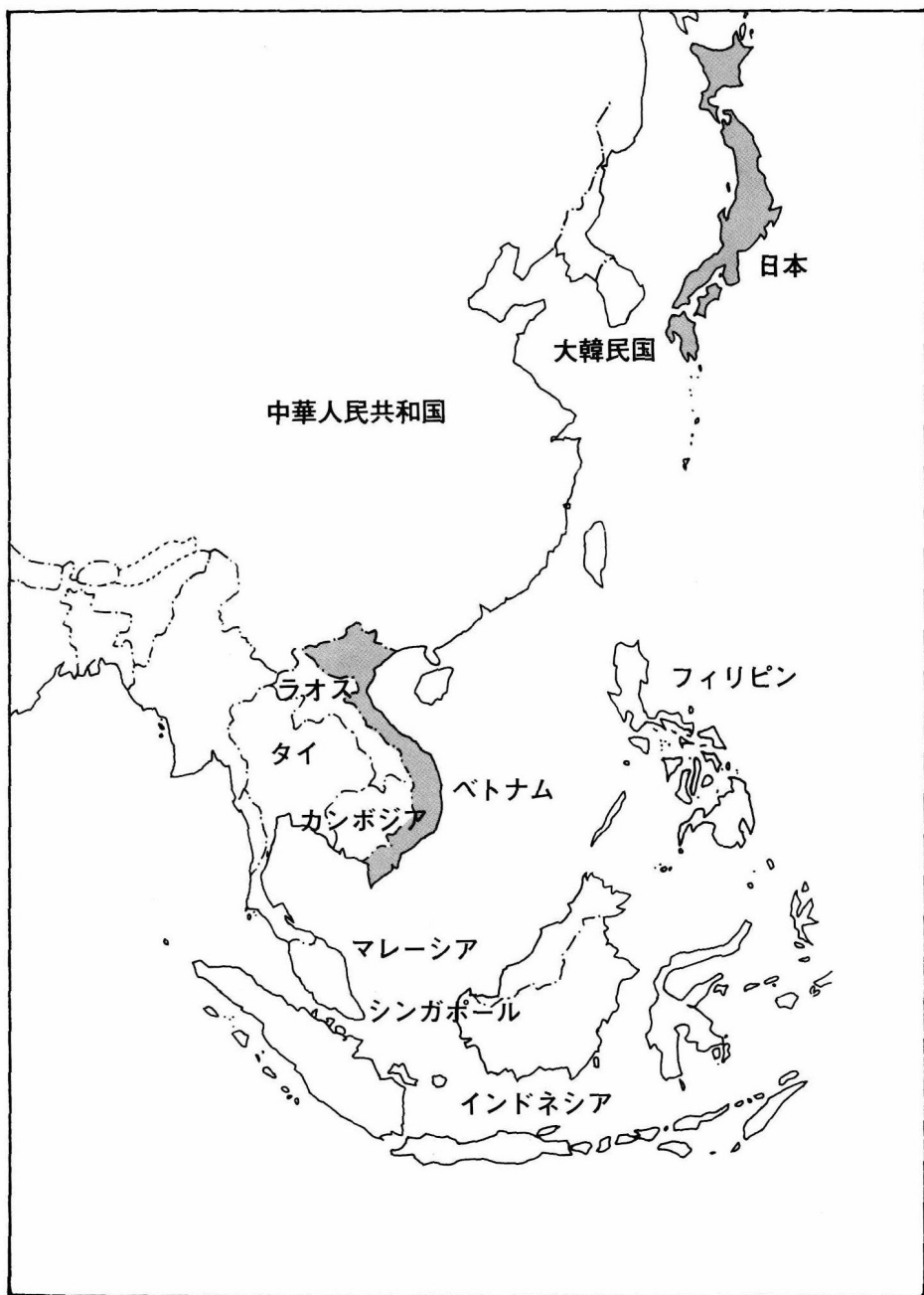
製本所 共文堂

ISBN4-408-36106-2

臣永正広

ベトナムから来たニンちゃん





はじめに

はじめに

東京の品川区立八潮小学校には、ベトナムから来た難民の子たちが通う「促進学級」があります。この本に出てくる「たんぽぽ」というのは、促進学級につけられたもうひとつの名前です。

ベトナムは、東南アジアの一角にある国で、面積は日本よりちよつと小さいくらいです。難民というのは、国の政治のやり方が大きく変わったり、戦争のために、しかたなく、自分の生まれ育った国を脱出した人たちのことです。

おとなだけでなく、小さな子どもまでが、命の危険をおかして、ベトナムから逃げ出しました。

促進学級の子たちも、平和な日本では想像もできないような経験をして日本にや

つて来ました。クラス担任たんにんをしている嶋津裕子先生は、「たんぼぼ」という名前にこめた気持ちをも、学級の文集にこう書いています。

「ベトナムの野山にも春になったら、黄色いたんぼぼの花が咲くのでしょいか。

もし、たんぼぼの花が咲くとしたら、君たちは、まさに、風に身をまかせ、自由と、生きる地を求めて、祖国の地を飛び立った、たんぼぼのたねのようです。

ひとつ、ひとつの小さくて、たよりない、その実の中にはそれぞれの夢と希望と、これから伸びようとするエネルギーをぎっしり、つめこみ、白い綿毛をいっぱい広げて、吹く風だけをたよりに、郷里の地を勇敢に飛び立ちました。

そして、今、たとえ、親兄弟と離ればなれになっても後を振り返らず、たねたちは、強く、けな気に、それぞれの旅を続けています。

たんぼぼのたねたちのような君たちよ、しっかり、自分たちの目で、これから根付く地面をみつめてください。そこに舞いおりたら、太陽の光をしっかりと受けとめ、自然の恵みを全部自分たちの栄養にして、グングン大きくなり、やがては思い思い

のすてきなたんぽぽの花を咲かせてください。そして、次の世代へ君たちの素晴らしい命を伝えて欲しいと思います」

そのたんぽぽクラスで班長さんをしていたのが、ベトナムから小さな船に乗って逃げだして来た女の子、ニンちゃんです。おとなしい性格ですが、ワンパクでケンカっ早いベトナムの男の子たちもいる促進のクラスを、しっかりまとめるたくましさもあります。

私がニンちゃんと初めて出会ったのは、一九八九年の九月のことでした。促進学級では日本語がいちばんじょうずなので、日本に来るまでのベトナムでの生活や、学校での勉強のようすなど、いろいろと話を聞かせてもらいました。

ニンちゃんが暮らしているのは、八潮小学校と同じ品川区にある、国際救援センターというところです。ここでは、ベトナムを脱出して助けられた難民の人たちのお世話をしています。

学校ではゆっくり話す時間があまりないので、センターに行ってニンちゃんに会

いました。ただ、そのころセンターにはいろいろもめごとがあつて、建物の中には入れませんでした。

しょうがないので、門の横の原っぱに二人ですわりました。木陰もなく、残暑の日ざしがジリジリと照りつけます。帽子もかぶっていなかったので、すぐに頭が焼けるように熱くなつてしまいました。でも、

「暑くてたいへんじゃない？ もうこれくらいでやめようか」

と、なんと聞いても、ニンちゃんは、

「大丈夫。まだ、大丈夫」

と、自分に言い聞かせるようにうなずき、おでこに汗が吹き出すのもかまわず、しんぼう強く話を続けます。

両親や弟、妹は、四年前にベトナムを出るときに別れたままです。いつになつたら会えるのか、ぜんぜんわかりません。思い出せば、悲しいことも多いでしょう。そのことについてもいろいろ聞いたのですが、がまんをして話してくれました。

時間を忘れて話していると、いつの間にか太陽は西に傾き、少しオレンジ色がま

じった光は、もう秋の気配を感じさせました。それがニンちゃんの細い首に当たって、うぶ毛が銀色に輝いているのが、とても美しく見えました。

ニンちゃんから聞いた話を中心に、難民の人たちのことをまとめたのがこの本です。

ニンちゃんは、優しい心と自由の大切さを、教えてくれたのでした。

もくじ

はじめに……………3

自由を求め、命がけの脱出……………11

促進学級の班長さん12 小学校三年生でベトナムを出る14 神様、助けてくださ
い18 「さよなら」もいえないで24 海賊に襲われると殺される30

戦争が終わっても平和じゃない……………37

ベトナムでいちばんきれいな町38 ベトナムの時計は進みがおそい42 国じゅう
が戦場になった44 学校の勉強も変わった51

自由の国・日本で味わう不自由……………61

海の彼方にはベトナムがある62 楽しいベトナムのお祭り66 難民どうしのケン

カ70 はじめて見るたくさんのお警察官73 厚く高い言葉の壁76 センターは満員
になってしまった81 ご飯も食べられない生活86

ベトナム人も日本人も同じ人間……………91

日本の冬は寒くてにがて92 オーストラリアに行きたい96 日本に住みたい難民
は少ない101 外国へ行く子ども日本語を勉強する106 ベトナム人と日本人がな
くするこは110

日本で暮らす難民の人たちはいま……………117

二つのクラスに席がある118 難民はベトナム人だけじゃない122 カンボジアの友
だち126 最初は問題もたくさんあった130 自分の国を知らない子どもたち136 勉強し
て大学へ行きたい139

難民問題は私たちを映す鏡……………149

楽しかった沖縄150 日本とベトナムには昔から行き来があった154 どうすれば友
だちになれるだろう159 難民の半分は子どもたち164 難民の人たちから学ぶ169

あとがき……………176

■著者紹介

臣永正広（とみなが・まさひろ）

1954年、徳島県に生まれる。日本大学法学部中退。広告代理店に勤務した後、週刊誌、月刊誌などでフリーランスの取材記者となる。9歳の長女を先頭に、1女、3男の4人の子の父親。現在、東京都練馬区在住。

■写真提供

林 正樹（朝日新聞出版写真部）

UNHCR（国際連合難民高等弁務官事務所）

共同通信社

有限会社C.P.C.

※写真提供の表記のない写真はすべて著者が撮影

自由を求め、命がけの脱出

その夜、ニンちゃんは両親や兄弟、友だちと別れ、三人のお姉さんとベトナムを出るために船に乗りました。九歳になった年の初夏のことでした。暗い夜の海へこぎ出した小船は、小さな波にも大きくゆれ、とてもたよりなさそうでした。

でも、まだ小さかったので、いつたいなんのために、どうしてふるさとを離れなくてはならないのか、よくわかりませんでした。それに、これから自分がどうなってしまうのか予想することもできませんでした。



(写真／UNHCR)

促進学級の班長さん

ニンちゃんは、十三歳のベトナム人の女の子です。東京の品川区にある国際救援センターというところに住んでいます。ここは、ベトナムから逃げ出して助けられた難民の人たちが、住んで働く国や場所が決まるまで生活したり、日本語の勉強などをするとところです。

ニンちゃんは、品川区立八潮小学校の六年一組に通っています。学校には、ベトナムの子のための促進学級もあり、ニンちゃんは、ここでは班長さんとして十人ほどの下級生の世話をしています。促進学級の子が住んでいるのは、みんな同じ国際救援センターです。

促進学級の担任は、嶋津裕子先生です。いつも明るく元気いっぱい、ニンちゃんたちのためにいっしょうけんめいがんばっています。

十三歳といえば、日本ではもう中学校に入学している歳なのに、ニンちゃんが小学六年生なのはどうしてでしょう。じつは、小学校三年までベトナムで育った二

ンちゃんには、最初さいしょは日本語がわかりませんでした。そこで、やさしい日本語を学ぶために、一学年下げて入学したからなのです。でもいまでは、もうすっかり日本語もじょうずになりました。

ただ、六年一組の友だちより少し年上でも、栄養えいようたっぷりに育った日本の子たちといっしょに並ならぶと、とても細ほそく見えてしまいます。背せの高さの順番じゅんばんでは、前から数かずえたほうが早いくらいです。

ニンちゃんは、とても恥はずかしがり屋です。こちらから話しかけなければ、ずっと黙だまっているような、そんなおとなしい女の子です。

胸むねまで伸ばした美しい黒髪くろかみを頭の左右で結むすんで、それが歩くたびにふわり、ふわりと揺ゆれます。エクボのできる愛あいくるしい笑顔えがおが、とてもすてきな女の子です。うすい墨すみでサツとかいたようなきれいな眉毛まゆげの下では、切れ長の目の中で、宝石ほうせきのように瞳ひとみがキラキラと輝かがやいています。その瞳ひとみが、意志いしの強さを感じさせます。

ベトナム人だと知らなければ、日本の女の子とほとんど見分けはつかないでしょう。

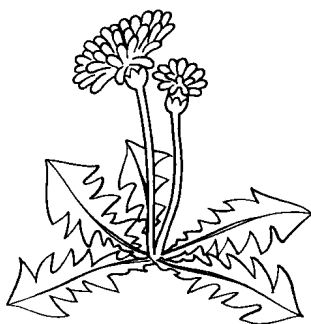
焼きソバやカレーライスが好きで、リカちゃん人形を宝たからものにして、魔法まほう使いサリーやひみつのアッコちゃんの大ファンです。

でも、ニンちゃんは、ベトナムから日本へ、飛行機ひこうきで来たのでもなければ、豪華客船ごうかきやくせんで来たのでもありません。それどころか、日本人の女の子には、いや男の子でさえ想像そうぞうもできないような恐ろしいおそ思いをして、日本にやって来たのでした。

小学校三年生でベトナムを出る

ニンちゃんが生まれ育ったベトナムという国は、日本からだひこうきと飛行機ひこうきでも六時間以上かかる三千六百キロのはるか海かなたの彼方かなたにあります。

ニンちゃんがベトナムを出たのは、一九八五年、六月十一日のことです。その年





ニンちゃんたちが乗っていたボート。この小さな船に、90人もの人
が乗っていました（UNHCR）

の一月に九歳きいになったばかりの、小学校三年生のときでした。

お母さんやお父さんに、

「自由な国に行って暮らさない」

といわれ、三人のお姉さんや大勢おおぜいの見知らぬ人たちといっしょに、暗い夜、ひそかに船ふねに乗ってベトナムを逃にげ出しました。

まだ小さかったので、両親や兄弟、友だちと離はなれ、生まれた国を捨てすてしまうことになるなんて、まったく思ってもいませんでした。まるでピクニックにでも出かけるような軽い気持きもちで、船ふねに乗ったのです。「そのときは、あまりよく覚えていないの。大きなアメリカの船ふねに助けたすけられて、